

留学生の受入れと日本社会への定着

— 中国人留学生は、なぜ日本を選ばなかったのか？ —

ZHANG Kaile

日本の少子高齢化は、すでに深刻な状態にある。現在の高齢者が占める割合が高いだけでなく、やがて定年を迎える団塊ジュニア世代や、低迷する合計特殊出生率も少子高齢化に拍車をかける。政府はすでに多くの政策を打ち出したが、効果は限定的である。自国内で少子高齢化を解決することには長い期間が必要な一方で、現在の労働市場は中小企業を中心に深刻な人手不足にある。この状況を解決するには、外国人労働者の受入れは必須である。しかし、外国人労働者の受入れには様々な課題も付随する。たとえば、これまでの日本企業の外国人労働者活用経験から見ると、日本企業が期待する外国人労働者像と現実とのギャップの問題がある。主な課題は、メンバーシップ型である日本型雇用に対する理解が浅いことや、外国人労働者の日本語能力を含めたコミュニケーション能力や協調性が足りないことである。

外国人労働力が必要であり、なおかつ日本企業により適合した労働力を獲得しなければならなかったら、その折り合いをつける上で留学生は最適な選択になるかもしれない。留学生は学校時代において、日本語を上達させ、日本文化を学ぶことができる。いわば日本企業で働く適性を高めるためのモラトリアム期間を持っている。また、多くの留学生の中から、特に中国人留学生に注目するのは、国籍別で最も人数が多いことと、全体的により高い学歴を有していることが原因である。

これまで留学生をめぐる多くの研究が行われてきたが、留学生に関する過去の調査研究においては、政策、企業および日本企業に就職する(した)留学生を調査対象としたものがほとんどである。これでは、「留学生を受入れ、定着させる」ことを目的とする研究としては、重要な研究対象者のカテゴリーを無視していることになる。すなわちこの「日本に留学して日本で就職する」というプロセスに入らなかった、日本を選ばなかった人たちである。

そこで、本研究では、日本以外の国に留学する中国人留学生 6 名(海外組)、日本に留学して、その後は帰国する/した中国人留学生 7 名(日本組)を対象者として、インタビュー調査を行

った。インタビューは半構造化調査として実施し、留学・就職のことだけでなく、対象者の経歴、嗜好、家庭状況や、経済、歴史、現地の人に対する主観的意識などの項目も含めている。そして、当該対象者の事情に応じた質問を随時加えることとした。

結論として、海外組は、留学先を選ぶ際に、自分に必要なものを具体的に念頭において、合理的な選択をする傾向が確認された。彼らが日本を選ばない理由は、以下の三つにまとめることができる。

- a) 高い学術性を求めている、その分野に強くない日本の大学を選ばない。
- b) 卒業後は中国で就職したいので、中国において知名度の低い日本の大学を選ばない。
- c) 日本語ができない、あるいは日本語を学ぶために時間を費やしたくない。

また、日本組は、日本に憧れて留学して、やがて想像と異なる日本の現実に失望して帰国した傾向がある。彼らの帰国までの道のりから、問題を以下の三つにまとめることができる。

- d) 留学生にとって、長期にわたる日本での生活、就学、および就業は、作品や観光から受け取った日本のイメージとのギャップが激しい。
- e) 日本組の人たちは、留学後の進路が不明確である。
- f) 日本の雇用慣行は中国人留学生に向かないところがある。

最後に、これらの発見に基づき、①大学の知名度向上、②文化的コンテンツによる日本語の普及、③キャリア教育の充足と早期化、④限定社員制度の活用という四つの改善策を提案した。

これにより、中国人留学生のさらなる日本への受入れ、そして日本に留学しに来た中国人留学生の定着率の向上を図る。そしてこれが少子高齢化の背景下にある日本の労働力不足を緩和すると期待している。